

知識の構造化を通して 深い学びを実現し、 活躍できる人材育成を

國學院大學人間開発学部初等教育学科教授

田村 学 たむら・まなぶ

新潟大学教育学部卒業。専門はカリキュラム論など。新潟県公立学校教諭、同県柏崎市教育委員会指導主事、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官、同省同局視学官などを歴任。同省で新学習指導要領の作成に携わった後、2017年度より現職。著書に『深い学び』（東洋館出版社）などがある。

國學院大學プロフィール

1882（明治15）年創設の皇典講究所を母体とする私立文系の総合大学。本部を東京都渋谷区に置き、5学部13学科、3研究科を擁する。教育目標に「主体性を持ち、自立した『大人』の育成」を掲げる。



情報技術の革新が進む中、今後の社会はますます急速に変化していくことでしょう。予見が困難となる未来の社会で活躍する人材には、「自分の手で社会を変え、よりよい未来を創造していくのだ」という意識が一層求められます。そして、そうした人材には、①「多様な他者と協働し、新たな『知』を創造する力」、②「適切な価値を選択して、思考し、判断し、行為し続ける力」、③「内省を深め、自分のよさや可能性に目を向ける力」という3つの力が不可欠だと、私は考えています。

それら3つの力を育んでいくためには、新学習指導要領で重視される「主体的・対話的で深い学び」が有効で、特に重要なのは「深い学び」です。子どもは、「深い学び」を進める中で、身につけた個々の知識・技能を関連づけて構造化し、いつでもどこでも知識を自由に使える（私はこれを「知識が駆動する」と呼びます）ように、高めていけると理解しています。このような知識の構造化を進め、深い

学びを実現するには、先生方が子どもにも知識・技能をインプットするだけではなく、子ども自身が習得した知識・技能をアウトプットしていく必要があります。そのために最も有効なのが、振り返りです。学習内容の確認や過去の学習内容との関連づけ、自己の変容の自覚など、深い学びや主体的な学びにつなげることができます。そうした機会を日々の授業に設け、「主体的・対話的で深い学び」を継続していくことで、子どもは先の3つの力を総合的に身につけていけるようになると思います。

子どもの学びの深さを先生方が把

握するには、学びが子どもの内面で深まり、少しずつ表面の変化に現れる状態を丁寧に見取る必要があります。そのためには、「子どもの学びが深まった状態」を具体的に思い描けるようになることが大切になります。そこで、教育委員会には、アウトプットに力を入れる学校の取り組みの具体例を数多く紹介し、学びを深める子どもの姿を示していただきたいと思います。そうして先生方が「目指す子どもの姿」を共有することで、教員主導の授業から、子どもを主体とする授業への転換も促されるのではないのでしょうか。

近未来への布石 教育委員会と連携した研修



田村教授は、全国各地の教育委員会と連携し、「深い学びとは何か」といったテーマを中心に研修会を行っている。神奈川県海老名市教育委員会とも連携を図り、年に数回の研修を実施。市内の小・中学校の教員研修では、代表教員による研究授業の後、子どもを主体とする授業改善について全教員が検討し合い、田村教授が講評・講演する活動を行っている。